【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	長崎県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	長崎県佐世保市立相浦西小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	4	4	4	4	1	２４	35
児童数	139	119	140	155	157	144	3	857	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「学ぼうとする力」を育てる，
個に応じた指導の在り方

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

（実施学年，教科）
・全学年，算数
（教科選択の理由）
・長崎県教育委員会より平成１３・１４年度に渡って調査研究協力校として『通常学級における集団参加が困難な児童への指導の在り方』のテーマのを受け，教科を算数科に絞り，平成１４年度から「自ら考える意欲を育てる，個に応じた支援の在り方」というテーマを設定し，３カ年の研究計画を立てていた。
・昨年度の算数科における実態調査より，高学年になるにつれて興味関心が低くなっていることを受け，教科を算数科に絞った。
・データの収集が他教科に比べて比較的しやすく，研究の検証をしやすい。

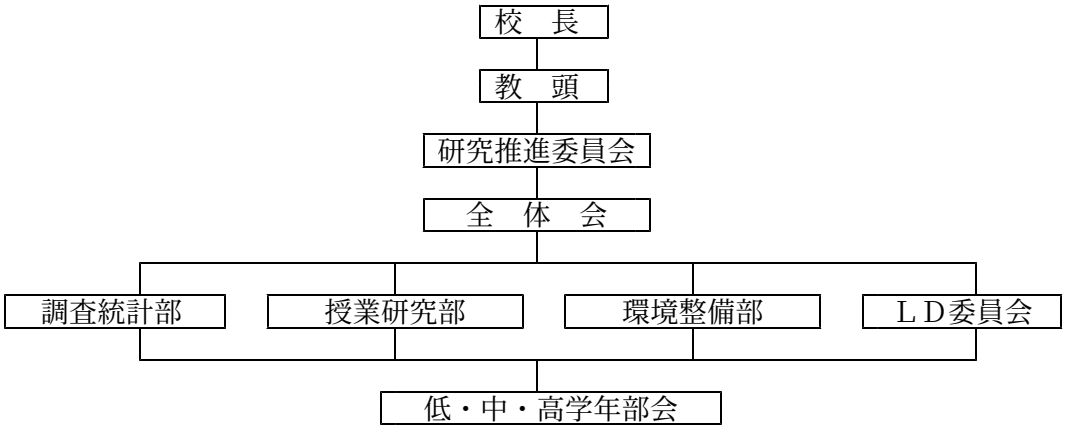
(2)　年次ごとの計画

平成14年度	

平成15年度	○　テーマ 　算数科における指導体制・授業展開の工夫改善を目指して ○　研究の見通し 　教科を算数科に絞り，指導体制・授業展開の工夫改善の在り方について研究仮説を立て，検証授業，客観的資料を基にして 研究主題「『学ぼうとする力』を育てる個に応じた支援の在り方」を模索していく。 ○　研究の内容 ・指導体制の工夫（習熟度別・コース別学習） ・基礎学力を身につけるための授業展開の工夫 ・算数的活動を取り入れた授業展開の工夫 ○　研究の方法 ・校内研究の推進体制を構築し，研究推進委員会，低・中・高学年部会，専門部会の各部会を中心に研究テーマに迫る。 ・全学年の公開授業を実施し，指導体制・授業展開の工夫が有効であったか検証していく。 ・各学年が採用している，単元毎の市販テストの結果を統計処理し，学力の推移，興味・関心の変容を考察し，検証していく。 ・市販テストを補完する目的で，ＴＫ式学力検査を全学年で実施する。

平成16年度	○　テーマ 　指導体制・授業展開の工夫改善を目指して ○　研究の見通し 　平成１５年度の成果と課題を受け，算数科に絞って検証してきた結果を他教科へ広げると共に，研究内容を絞って，具体的な成果を出す。 ○　研究の内容 ・指導体制の工夫（習熟度別・コース別学習） ・基礎学力を身につけるための授業展開の工夫 ○　研究の方法 ・校内研究の推進体制を構築し，研究推進委員会，低・中・高学年部会，専　門部会の各部会を中心に研究テーマに迫る。 ・全学年の公開授業を実施し，指導体制・授業展開の工夫が有効であったか検証していく。 ・各学年が採用している，単元毎の市販テストの結果を統計処理し，学力の推移，興味・関心の変容を考察し，検証していく。 ・市販テストを補完する目的で，ＴＫ式学力検査を全学年で実施する。

(3)　研究推進体制



全体会・・・・・・全職員の共通理解　推進委員会からの提案事項の協議
研究推進委員会・・校内研修全体の計画・運営
（校長，教頭，教務，研究主任，各学年代表）

◇授業研究部・・・研究主題に迫るための指導体制，授業展開の在り方を検討，提案　していく。
◇環境整備部・・・研究主題に迫るための学校（教室）環境の整備計画及びあたごタイム（朝の活動）の運用計画を立てる。
◇調査統計部・・・児童の実態をアンケート調査や具体的データを基に明らかにし，検証に生かせるようにする。
◇ＬＤ委員会・・・ＬＤ傾向にあると思われる児童の実態を把握し，算数科学習における有効な手立てを模索する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

指導体制の工夫（習熟度別・コース別学習）について

指導体制の工夫について

少人数指導（２クラスを３名の指導者による指導体制）

・人数が少ないので，評価を効果的に指導に生かせた。
・通常クラスの学習とは違った雰囲気で学習するので，よい意味での緊張感を持って授業が実施できた。
・１時間の中で全員の児童のノートを確認することができ，理解度が把握しやすい。
・１時間の中で，一人一人に声をかけることができた。

習熟度別指導

・単元末に実施した習熟度別学習は，これまでの学習を振り返り，自己評価をする機会にもつながった。
・学習内容の理解が進んでいない児童にとっては，基本的な問題を復習する時間が確保でき大変有効だった。
・学習が進んでいる児童にとっては，発展的な問題を興味を持って取り組むことがで

きた。
・一斉授業では，個別指導が必要だった児童も，じっくり取り組むコースの中で理解度も高まった。

コース別学習
・コース別学習は，子供たちも意欲が高まり，効果が上がった。
・自分で選んだコースで学習したことが学習意欲につながった。

Ｔ・Ｔ指導
・計算能力が向上したことで算数の時間を楽しみにしている児童が増えた。
・理解が不十分な児童だけを集めて個別に支援するということもできた。
・作業を伴うような単元は，遅れがちな児童への個別の対応がとりやすい。

基礎学力を身につけるための授業展開の工夫について
西小プランＡ
・時数も適切に配分しやすく，苦手な児童群が取り組みやすかったように思われた。
・学習の理解が遅れている児童にとっては，目に見える学力はつきやすかった。
西小プランＢ
・復習で集中力を高め，その日の課題に入りやすい。特に復習課題がその日の課題と深く関わるときは効果がある。
・はじめに習熟の時間を集中して設定したので，１時間の学習に集中してできた。
・児童がスムーズに授業にはいることができた。
西小プランＣ
・児童の多様な考えを引き出すことができた。
・自力解決の習慣が身に付きつつある。
・外的な算数的活動を取り入れることで，興味を持って学習に参加する児童が増えた。

算数的活動を取り入れた，授業展開の工夫について
・計算の仕方がわからない児童や数の概念がイメージできない児童にとっては，計算ブロック等の半具体物を使った操作活動は，有効である。
・授業の導入時でフラッシュカードを使って，１０の構成や簡単なたし算やひき算の練習を行い，算数に対する関心が高まった。
・操作活動（ブロック，タイル，おはじき，作図）をすることにより，理解が遅れている児童も，数をまとまりとしてとらえることができ，意欲的に学習していた。
・繰り上がりなどの概念理解に役立った。
・自力解決できない児童は，操作活動で答えが出せ，満足していた。
・児童の意欲を高め，授業時間以外でも算数に興味を持って操作活動を行った。
・思考力が低い児童も操作活動をしながら時間いっぱい考えていた。普段活躍する児童とそうでない児童の逆転現象が起きた。

２．今後の課題

指導体制の工夫（習熟度別・コース別学習）について

・児童の希望を尊重して２グループに分けたが、自分で問題をすいすい解いていくグループを希望した子供の中にも十分理解していない児童がいたので，希望を尊重して行う，習熟度別学習の難しさを感じた。
・３学級を解体することで生徒指導上問題が発生したこともあるので，そういった点での配慮は必要である。
・自分のクラスの児童だけでないため，欠席やその時間にわからなかった児童への指導が難しい。
・コース別学習は，単元の途中でコースを移動したため，児童の実態把握が難しい。
・習熟度別学習は，人数の偏りがでた場合，指導が困難である。
・人数，メンバー，体制がよく変わったので，落ち着かない。
・打ち合わせの時間の確保が課題である。

基礎学力を身につけるための授業展開の工夫について

・Ａプランは，問題を解決していこうとする意欲に欠けるような気がした。
・Ａプランは，解き方がわかると，思考に広がりがないように感じた。
・Ｂプランは，課題解決の時間がやや少なくなった。
・Ｃプランを実施したが，力を定着させるために練習する時間がほしい。
・ねらいに迫る算数的活動の開発がＣプランのとても大きな課題。
・Ｃプランは，学力の高い児童が終始活動しがちで，話し合う力・聞きあう力がないと十分な効果が見えてこない。
・自力解決の時間の確保と練習・定着の時間の確保両方を１時間の中で十分にとることができない。

算数的活動を取り入れた，授業展開の工夫について

・操作活動の必要性は感じるが，時間がかかりすぎることがあった。
・算数的活動の充実と習熟の時間の確保を両立させたいので，単元を通してウェートをかけるところを見つけなければならない。
・生活場面に即した内容など，もっと発展的な活動を取り入れるべきだった。
・進度などの関係から，どうしても余裕のない授業展開が多くなってしまった。
・習熟の時間の確保は，課題として現存している。

以上, 述べてきたように今年度の研究においては, 上記のような成果と課題が得られた。課題も山積しているが，今年度の研究を振り返ると，従来の一斉指導による指導体制ではなく，学級を解体しての少人数指導等の指導体制を工夫したことで，指導者が「学級」という枠を超えて，学年全体の児童の指導に当たり，「確かな学力」を育てていこうという意識の向上につながったことも成果といえる。

また，「授業展開の工夫」という視点から学習の流れを見直したことで，固定的であった授業展開を柔軟に考えて単元の目標に迫れるようなより効果的な学習の進め方を意識するようになった。

しかし，「学力向上フロンティア事業」の視点から振り返ると，研究成果を他校へ還元していくという部分においては十分とは言えない。また，今年度は，教科を算数科に絞って研究を進めてきたが，他教科への広がりを意識していくことも課題として残された。

今年度出された成果と課題を生かして，児童が「学習が楽しい」「もっとやりたい」と言えるような指導体制・授業展開の工夫をめざしていきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

１　各学年で実施された市販算数テスト

（調査の目的）算数科における既習内容の定着度と学力の関係を計るため。

（調査の内容）算数科の全単元内容

（調査の時期）年間を通じて

２　ＴＫ式学力検査

（調査の目的）市販テストを補完する目的で実施。

（調査の内容）算数科の既習内容

（調査の時期）本年度２回（７月，１月），来年度１回（７月）とする。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１　「学力向上フロンティア事業中間発表」

日　時　平成１６年　１月　２９日

場　所　長崎県佐世保市立相浦西小学校

対　象　佐世保市内フロンティアスクール指定校

目　的　研究の成果を公開し，次年度の研究に生かせるような外部評価を受ける。

２　研究紀要の配布

目　的　研究の成果を公開し，次年度の研究に生かせるような外部評価を受ける。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　□１３～１８学級　■１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　■ 少人数指導　■ Ｔ．Ｔによる指導　□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　■算数　□ 理科　□ 生活　□ 音楽　□図画工作　□ 家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■ 有　□無